

次世代に残したいブナの森

飯山市振興公社 森の家指導員 わたなべ たかみつ 渡辺 貴光

要 旨

鍋倉山には、国内でも有数の大きさを誇る「森太郎」（写真-1）を初め貴重なブナ林が保存されているが、入込者の無秩序な踏み固め等から樹勢の衰えや、林内の灌木等の倒伏などの被害も目立って来ていることから、早急な保護・保全の在り方を検討することが求められています。このため各界・各機関や一般市民参加による「いいやまブナの森倶楽部」を設立し今後の在り方について検討を加えることとしています。

はじめに

私の勤務する「なべくら高原・森の家」は飯山市北部、鍋倉山の麓標高600mに位置し、豊かな自然と国営開発農地の広大な農場に囲まれた体験型宿泊施設です。

森の家は、1997年飯山市が建設し、農業体験や自然観察会、わら細工やそば打ち体験等の田舎体験、また、冬は歩くスキーや今話題となっているスノーシュー等のアウトドア体験を提供して飯山市が推進しているグリーンツーリズムの活動の拠点となっている施設です。

森の家での私の担当は自然観察で鍋倉山には良く足を運びます。



写真-1 勇壮にそびえ立つ森太郎

鍋倉山のブナについて

鍋倉山（標高1,288.8m）は、長野県飯山市と新潟県の県境となっている関田山脈に位置し、まだらおやま主峰斑尾山（標高1,381.8m）に次ぐ高さの山です。鍋倉山のブナの歴史はおよそ1万年前からと言われ、現在も原生の状態に近いブナ林が残されています、樹齢200年程のブナが数多く自生するこの山は昔から山麓に住む村人達と深く関わって来ました。

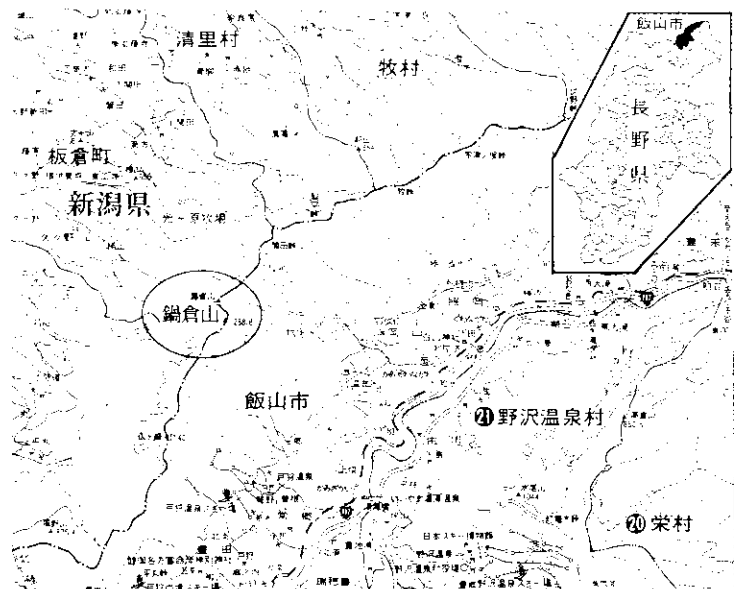


図-1 鍋倉山の位置図

飯山市の中でも最北に位置するなべくら高原は、豪雪地帯として知られ、一里行くと一尺雪が増え地域の人は「一里一尺」と言いました、平地でも多い時には4m近く、鍋倉山まで上がると6m以上の積雪があり、春6月になっても残雪があります、たくさん降り積もった雪が春になり解けだすと、ブナで覆われた鍋倉山はその雪解け水を貯水し田植えの時期が来た村々の水田を潤します。

「ブナ一本で一反歩（10アール）の田の水を蓄える」と、長年麓の村に住み稲を作ってきた人の尊い言葉があります、

一反歩の水田から米8～10俵収穫する事が出来ます。

鍋倉山から流れでる清流の一つをたどっていくと西の沢と呼ばれる谷があります、樹齢200年以上のブナが林立しているその中に「水源林」と斧等で刻まれたブナがあります、このブナの事を村落の者に聞いても、文献を調べても判りません、文字の広がり等を見ると100年以上前に刻みこまれたものと思われる。



写真 2 冬の鍋倉山

緑のダム、自然の水瓶と言われるブナの森ですが大昔の人は生活の中で実感としてとらえていた事と思われる、大雨が降ったり、旱魃であっても一年中同じ量の水を村々にあたえ、土砂崩れや雪崩を防いできたブナの森のある山を地元の人は神の山、母なる山として敬い山と共に生きてきました。

鍋倉山の伐採・開発計画等について

鍋倉山の伐採については昭和10年代（1935年）から始まり、主に薪炭用材、船舶用材、パルプ用材として伐採されて来ましたが、1986年9月には鍋倉山伐採計画が当時の長野営林局飯山営林署から発表されましたが、地元住民等の反対運動により伐採計画が中止となりました。

鍋倉山を中心とするリゾート計画については、1972年に民間企業がスキー場開発のための気象条件や地形などの調査を開始しましたが1977年にオイルショックからの景気回復の遅れを理由として撤退しました。その後1990年に飯山市と民間企業によるスキー場開発計画が持ち上がりましたが1992年のバブル崩壊のため撤退することになりました。

鍋倉郷土の森の設定及び現状について

鍋倉山の「郷土の森」は貴重なブナ林を保全するため1990年飯山市長と当時の長野営林局長との間で契約が締結され現在に至っていますが「郷土の森」の整備の遅れやここ数年で鍋倉山を訪れるハイカーが急増したことにより、根本的な保護・保全の必要性が指摘されるよう

になりました。

「郷土の森」の一つである通称「巨木の谷」には鍋倉山のシンボルといわれる樹齢400年以上の「森太郎」・「森姫」（写真-3）と言われる巨木がありますが、これらの巨木が倒木の危機に瀕していることです、昨年春、もう一つのシンボルであった通称「こぶブナ」と呼ばれる巨木が倒れました。

これらの巨木には人々が集中してしまい木の回りの根が踏み固められたことも要因になっている事と思われます。特に比較的人の近付きやすい場所に位置する「森姫」は季節外れの落葉や枝先が枯損したりするなどこれまでの「森姫」に比べ一回り以上も小さくなった様子です。

植物を直接傷つけたわけではないのですが、人間が森に入るということだけでも自然を犯している事が判ります。

高速道や新幹線の開通、そして何よりも白神山地のような奥深いブナ林とは違い里山である鍋倉山はだれでも気軽に訪れることが出来る事から入山者は年々増加しています。

あまりにも多くの方が鍋倉山に入るため原生の森は傷つき、もともと整備されていない山道は荒れ、自然にとっても人間にとっても危険な状況にあります。

昨年は、未整備の散策路の道標としてブナの幹に矢印がペイントされるという事例も発生しました。

まとめ

観光資源としての鍋倉山は地元飯山市にとっては、期待の高まっていくところです、森の家では、都会と農村をつなぐグリーンツーリズムと言う観点から、また、森の家に森林インストラクターとして登録して頂いている皆さんからの熱心な声懸りもあり、これからは自然保護と観光資源の両面から鍋倉山の在り方を考えていく事が必要だという意思が固まりました。



写真-3 森姫と子供たち



写真-4 鍋倉山と水源池

自然破壊という言葉は比較的都市部に近いところで聞かれますが、一見緑豊かな「なべくら」でも確実に進んでいると感じます。

昔は炭焼き等で生計を立てていた村の人々も今ではあまり山に入ることがなく鍋倉山への関心も薄れて来ているように思います。

このように、人とブナが築いてきた里山を、地元に住生活する人々にも再認識していただき、鍋倉山を訪れる人々にも同じ意識を与えていかななくてはならないと考えます。

鍋倉山の麓に暮らす村人にとっては、昔から密接にかかわってきた里山であり、県内外から訪れるハイカーにとっては、自然に触れる憩いの場となっています。様々な者が様々な形でかかわっている鍋倉山を次世代に残していくためにそれに関わる者がおなじ土俵に上がり、同じ意識を持ち、それぞれの立場で議論を進めることが必要となります。そこから人と自然との新しい関係が生まれ、従来からの枠に囚われない「官民一体」となってこの貴重な宝をどのように保全し有効に活用ができるかを討議・検討をし、100年後の鍋倉山を見据えていく連絡会「いいやまブナの森倶楽部」の発足を目指し、これを全国に発信し鍋倉山だけでなく「全国区のブナ」を考えていきたいと思っています。この会にご賛同いただける方がいらっしゃいましたらぜひ入会をお待ちしています。